

Weekly Report

2018~2019 年度 第 53 期会長テーマ

『未来に向けて』

例会日 毎週 木曜日
 例会場 産業文化センター
 事務局 多治見市新町 1-23-4F
 T E L 0572-25-5100
 F A X 0572-25-5101
 Email n-rc@joy.ocn.ne.jp
 H P http://tajiminishi.jimdo.com
 会 長 齋藤 明
 幹 事 加藤 健治



第 2534 例会 2018 年 12 月 13 日

12 月は疾病予防と治療月間

本日のプログラム

点 鐘

ロータリーソング 我らの生業
四つのテスト

会長挨拶
 出席・スマイル報告
 委員会報告
 幹事報告

卓話 藤本尚子様
「福澤桃介の未来からの挑戦」

点鐘

卓話者ご紹介

藤本尚子様

母の郷里、三重県名張市にて小・中・高時代を過ごす。大阪外国語大学(現:大阪大学外国語学部)ドイツ語学科在学中よりイサドラ・ダンカン伝記等の翻訳。Staedler ドイツ工業用ミシンメーカー日本総代理店の社長秘書を経て、日本楽器(ヤマハ)大阪支店販売企画課にリクルート直後に結婚・出産。その間、名古屋大学大学院に研究生として通いつつ、フリーランス翻訳士として国際翻訳に登録。ドイツ公害裁判・アメリカ原子力エネルギー政策文書ほか、大学教員のために研究書類を翻訳。1982年、文芸誌『海燕』にて作家デビュー、『貌』『象』『YOYO』『VAV』などに小説、評論を発表しつつ、新聞にコラムなども執筆。1997年に小説『マンガース族の決闘』を出版。シンガポールの星日報、マレーシアの南国新聞に小説連載。2003年以降、作詞活動を始め、現在日本作詞家協会と日本音楽著作連合に所属。貞奴のオペラ原作執筆をきっかけに同時代の福澤桃介、川上音二郎と彼らに影響を与えた維新世

代をも研究対象とし、貞奴フォーラムを主宰、その機関誌「香葉」の監修に従事。

『天馬行空大同に立つ』執筆以降は講演の傍ら、貞奴・桃介に関するパネル展なども企画。

理事会報告

- ① 会長挨拶
- ② 幹事より 12 月・1 月例会行事説明
- ③ 親睦家族忘年例会 自己負担金 7,000 円で決定
- ④ ⑤ 複合機リース契約・パソコン購入 承認
- ⑥ 会費検討委員会 次回、理事会で再検討
- ⑦ クラブジャンパー購入 承認
- ⑧ 東濃新報社 協賛金について 承認

先週の記録 ◆ 出席報告

会員数 34 名 出席免除者 6 名 出席義務者 28 名

出席者	欠席者	出席率
26 名	3 名	92.85%

◆スマイル報告 投函者 22 名 金額 27,700 円

会長挨拶

齋藤明

もうすぐクリスマス。

もういくつ寝るとお正月の季節となりました。

今月の出席は 3 回です。時間の許す限り出席をお願いいたします。12 月は、疾病予防と治療月間です。2014 年までは、ロータリー家族月間で、世界平和は、地域家族から始まるとの家族の重要性を訴えたものです。昔からの先輩は、この月間の方が馴染があるのではないかと思います。

2014 年 10 月 RI 理事会において、疾病予防と治療月間となりました。医療従事者の能力向上、伝染病の伝播を食い止め、合併症を減らすためのプログラム。インフラの改善疾病の蔓延を防止する事を目的にした月間です。又、それに関連した仕事に従事する専門職業人の為の奨学金支援を強調する月間でもあります。ロータリーがポリオ撲滅に力を注ぐのは、ポリオは、ウイルスによる感染力の強い疾患で、感染した 200 人に 1 人は重傷となり、一生背負っていく病気で特効薬はなく、予防に力を入れているのです。日本は 1981 年に根絶となりましたが、世界では、あと 3 か国です。もう少し、頑張りましょう。

11 月 22 日の卓話

小瀧康裕君

小瀧の苗字は大変少なく私が聞いている範囲での我が家の歴史は、伝承では先祖は源平合戦で有名な那須の与一？とされています。小瀧の苗字は、おそらく現在でも岐阜県内に 1 件ではと推測されま。祖父と祖母は共に再婚で、祖母は自分の実家に前夫との間に生まれた子供を残して多治見に嫁いできました。残された一人息子さんの名前は、石原清志さんと言います。根羽村の清志さんが学校卒業と同時に、母に会いたい・母の助けに成りたい一心で滝呂に来てしまう。清志さんに召集が掛かり兵役に取られ多治見より出兵。そして昭和 19 年からのレイテ島の戦いにて戦死。帰って来たのは、白木の箱に中身は石ころが一つ入っていたと言っておりました。祖母ふみは、その箱を抱いて一晩中泣きくれたそうです。☆後年の清志さんに関して不思議な出来事が起こりました、それは私が大学生の夏の夜 11 時過ぎの事。一本の電話が有りました、老年の女性の声で「夜分遅くに申し訳ありませんが、もしやそちらに小瀧清志さんは御在宅でしょうか」…理由を伺いますと、現在ご主人が末期の病で、病床の床より、自分が戦争時新兵で岐阜の師団に居た頃、慣れない軍隊生活で上官の理由の無い体罰や厳しい指導の中、何くれとなくとても親切に接して頂き、時に自分を上官から庇って頂いた事も有り、自分の命が有るうちにその時のお礼が言いたいと毎日うわ言の様に繰り返すとの事でした。御主人の記憶の中で、多治見出身で名前は小瀧清志この二つの事を頼りとして思い切って電話を掛けたとの事でありました。その理由を聞いて私は瞬間電話口で迷いました、事実を伝えるべきか否か、私の中で大変な葛藤が有りましたが意を決して真実を伝えました。すると電話口の先の女性は、「そうでしたか」と言った切り長い間沈黙されていましたが「夜分遅くに申し訳有りませんでした」と電話を切られました。その夜、私は、清志さんの人生とは・祖母や残された家族の思いとは改めて考えさせられたその中で {戦争は、所詮悲しみと憎しみと破壊しかもたらさないと痛感しました。} 戦後 73 年を経た現在、今こうして生活している事に多くの方々が少なからず感謝の気持ちを今後も持ち続けて欲しいものです。